

「ほとけ」考——日本人の死者観について——

佐々木 宏 幹

一 はじめに

十年ほど前のことになるが、主婦連合会がこの国の主婦たちの意識調査を行なったことがある。そのなかに「葬祭はどの宗教によって行なうか」との質問があつて、得られた回答によると約九五%が仏式によって行なつて行なつて（いた）ことが明らかになつた（「主婦の意識調査」一九八〇）。

葬祭を他の宗教に依頼せず、仏教に依頼した人たちが九割を超えたからといって、ただちに日本人の九割が「仏教徒」であると短絡するこ

とはできまい。九割には及ばないにせよ、かなり多くの人びとが結婚式を神式で行なつていようからである。

それでは葬祭を仏教によって営んだ人たちは「仏教徒」ではないかとなると答えは決して容易ではあるまい。事は「仏教徒」の定義に関わる問題である。

いま葬祭と結婚式を例に、日本人の多くが仏教と神道の両者に関わる事実を指摘したが、重要なのは「関わり方」である。

日本人は葬祭Ⅱ仏教と結婚式Ⅱ神道のうち、どちらに永続的に関わるか、そしてどちらの行

事・儀礼により熱心かを考えると、データのにもそれは葬祭＝仏教であるということになる。

結婚式を神社で行なったからといって、その夫婦が永続的に神社に関わる訳ではない。

一過性という意味では病氣＝病院の關係とよく似ていると言えよう。

これにたいして葬祭＝仏教の方は、一度寺と僧に死者の弔いを依頼すると、その關係は三十年、五十年と続き、地域にもよるが百年以上に及ぶことも少なくない。

かくして僧の教化力にもよるが、人びとは自分を「仏教徒」であると自覚し、寺参り、墓参りが持続するにつれて、この自覚は強化されるにいたる。生者が洗礼を受けることにより、自分キリスト教徒であることを自覚するという「入信」の文化は、この国にはまだ十分に育っていない。

生者が「得度」(式)を受けて仏教徒になると

いうルールはこの国では広く一般化していないからだ。

多くの日本人は、身内に死者が出たとき、寺と僧に依頼し、葬祭を営んだことを機縁に死者も生者も「仏教徒」になるのである。

実は、葬祭は死者にたいして行なわれる得度(式)であり、「得度」の度は渡と同じでこの世(此岸)から仏の世(彼岸)に渡す(渡る)ことを意味するのである。

得度はこのように、人が仏の元に行くことであるが、日本では概して得度を生者にはなく死者に行なうという慣行をつくりだした。そして他の仏教国には見られないような「ほとけ」という観念・思想を生みだした。

二 「ほとけ」とは何か

日本で最も代表的な国語辞典とされる『広辞苑』の「ほとけ」の項を引いてみよう。そこに

は「仏(ぶつ)」の転「ほと」に「け」を付した
もの、また「浮屠(ふと)家」…とあり、さら
に「①悟りを得た者。仏陀。釈迦牟尼仏。」、ま
た「④死者またはその霊。」としている(第四版)。
「ほとけ」の語源については後述するとして、
ここで重要なのは「ほとけ」は一方では仏陀(悟
りを得た者)、釈迦牟尼仏を意味し、他方では死
者と死霊を指すという点である。

つまり「ほとけ」の概念は、仏陀・釈尊と死者・
死霊を含んでいる複合的な概念なのである。日
本では釈尊も「ほとけ」、死者も「ほとけ」と呼
んで平気であるが、たとえば南方仏教の人たち
に釈尊も死者(死霊)も等しくbuddha(仏陀)
であると説明したら、彼らは一瞬言葉を失うの
ではあるまいか。

「ほとけ」はどうやら日本独特の仏教語であ
るということになる。

この「ほとけ」をめぐる研究者のたちの考え

方も決して一筋縄にはいかない。

一般に仏教学者や仏教教理に関心をもつ人は
「ほとけ」に「仏」を当てようとする。他方民
俗学者や日本の民俗宗教を学ぶ人は「ほとけ」
を「ホトケ」と表記し、専ら死者と死霊を意味
するものとする。たとえば「八丁堀の旦那、川
から二体のホトケが上りましたぜ」と語るとき
のホトケは直接仏||覚者には結びつかない。庶
民用語の「ホトケ」はこのように死者・死霊の
代名詞なのである。

かくして現行の日本語HOTOKUの表記には
「仏」「ほとけ」「ホトケ」の三通りがあるとい
うことになる。

これら三通りのHOTOKUの語は、現代にお
いてはきわめて恣意的かつアランダムに使用
されている観があり、このことが場合によって
は日本の仏教を分かり難くさせ、誤解を生じさ
せる一因にもなっている。



これら三通りの表記＝用語をどう整理したらよいか、これは大きな問題である。

ここでは短絡的との批判を怖れず、私見を述べてみよう。

有賀喜左衛門によると「仏」を「ホトケ」と呼ぶ呼び方は奈良時代中期には成立しており、のちに仏像や氏の先祖も「ホトケ」と呼ばれるにいたったという（「ホトケ」という言葉について―日本仏教史の一側面―一九七四）。

仏像は別として氏の先祖を「ホトケ」と呼ぶことは、仏教＝僧が先祖儀礼すなわち葬祭に古くから関与したことを意味するだろう。そして仏教の葬祭への関与が全国規模に広ったとき、つまり江戸中期以降、「ホトケ」の語は仏教が扱わない一般の死者・死霊にも適用されるにいたったのである。そこで私は同じくHOTOKEと呼ばれる対象のうち教理上のHOTOKEは「仏」、
「仏」と儀礼的に関係づけられない死者・死霊

を「ホトケ」、そして葬祭儀礼により「仏」に結びつけられた「ホトケ」が「ほとけ」であると捉える方が、「仏」―「ほとけ」―「ホトケ」の関係がよりすつきりするのではないかと仮説してみたのである（拙著『ほとけ』と力―日本仏教文化の実像―二〇〇二）。

「ほとけ」は僧により「仏＝覚者」の性格を具えるにいたるが、「ホトケ＝死者（霊）」の性質を全く失った訳ではない。だから「ほとけ」は「仏の子」「仏弟子」などと呼ばれると同時に「先祖（霊）」「死者（霊）」などとも称される。「ほとけ」は実に「仏」と「霊」との特性を併わせもつ特異な存在である。

「ほとけ」は覚路を歩み、「仏」に接近している存在であるとともに、墓や位牌に宿る霊的存在でもある。

このように「ほとけ」は「仏」と「霊」を包みこんでいる両義的存在であるから、仏教と民

俗宗教とを見事に媒介・結合せしめえたのではないか。

三 ほとけ・ホトケの語源について

日本人はいつたいつ頃から「仏」を「ほとけ・ホトケ」と訓ずるようになったのであろうか。いろいろな説のなかで最も注目したいのは、前述の有賀の説と柳田国男の説である。有賀は柳田の説を批判して自説を展開したという経緯があるので、柳田説から始める。

柳田は仏教が好きでなかったらしい。彼の学問的姿勢には、仏教が日本に定着する以前の宗教文化こそ日本本来の宗教であると考え、意識的に仏教的要素を除外しようとしたところがあった。

「ホトケ」の語源についても柳田は、この語は仏教に由来するものではなく、死者を祭るときに用いた行器をホトギ（缶）と呼んだことに

起源すると主張した（『先祖の話』定本柳田国男集第十巻）。この柳田説に疑念を抱いたのが有賀であり、彼は『後漢書』の楚王英伝の注に出てくる「浮屠仏也」や「浮図、今仏也」の記述から、「浮屠」「浮図」の語こそが「ホトケ」の語源であろうと仮説した（有賀前掲論文）。ただし彼は「浮屠・浮図」が「ホト」となったとしても「ケ」が「ホト」に付いたいきさつはなお不明であるとしている。

四 「ほとけ」と日本仏教

いずれにせよ、「ほとけ」の概念がわが国において広く庶民大衆化したという事実は、日本仏教にとつて画期的な出来事であったと言える。

なぜならこの「ほとけ」の語によって、本来は結びつくのが難しい「仏」と「死者」とが連結し、複合化することとなったからである。「仏」は一切存在の無常・無我を説き、究極の涅槃寂

静を実現された。他方「死者」は先祖霊つまり「ほとけ」となって、恒久的な一族の守護神的な存在と化す。それは仏教学から見ると、無我与靈魂という相容れない矛盾した存在同士の野合もどきのこととされる。

ところがこの国では、僧が縁起・無自性・空を説きながら、同時に「死者＝ホトケ」を「仏」に近づけるとともに「先祖＝ほとけ」として安定させる役割を現にはたしている。

これが可能になったのは、「仏」も「死者」も等しく「ほとけ」と呼ぶことにより、矛盾するとされる両者が巧みに関係づけられたからである。

「ほとけ」の語の出現により、「霊＝ホトケ」は「ほとけ」という中間領域に位置づけられ、さらに「仏」のレベルに関係づけられるのである。「ほとけ」は「仏」と「霊」を包含するゆえに両義的であり、弾力的かつ曖昧である。

日本において外来の仏教が在来の民俗宗教と衝突・葛藤し、多量の血液を流さずに民衆化しえたのは、「ほとけ」に象徴されるように両者を媒介する中間領域が用意されたからであろう。

「仏」―「ほとけ」―「ホトケ」の連携は、実に日本仏教文化が生みだした傑作と言えるのではなからうか。

佐々木 宏幹 一九三〇年宮城県に生まれる。

駒澤大学文学部を経て東京都立大学大学院博士課程修了。

専攻 文化人類学・宗教人類学。文学博士。

現在、駒澤大学名誉教授。日本宗教学会常務理事。国際宗教学研究理事。著書に『宗教人類学』（講談社）、『聖と呪力の人類学』（講談社）、『仏と霊の人類学』（春秋社）『神と仏と日本人』（吉川弘文館）『シャーマニズムの人類学』（弘文堂）ほか。